

文化財シンポジウム

文化“的”な価値を
まもる ことと
つなぐ ことを考える。

神戸だからできる文化財活用とその未来とは？

2024 年

12月15日(日) 13:30~16:30 (開場 13:00)

会場：デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO) 2階 ギャラリー C

文化財シンポジウム

文化「的」な価値を まもることと つなぐことを考える。 —神戸だからできる文化財活用とその未来とは？—

神戸市内には北区・西区を中心に約 800 棟の茅葺きの建物が現存している。また 1000 年以上続く無形文化財の祭が引き継がれているなど、無形・有形文化財が数多く残っている。中央区や北野エリアなどの街側には旧外国人居留地など、神戸は文化「的」な資産が数多く残っている都市であるといえよう。これらを今後の未来に繋げていくために何ができるのか。都市と農村が近い神戸だからこそできることはあるのか。デザイン都市神戸における「今までの文化を守り繋げていくこと」や、「これからの文化のありかた、つくりかた」を考えます。

第 1 部 (13:30~14:30) 改めて【文化財】について考えてみよう

第 1 部では、村上氏による文化財についての講演を行います。

「文化財」って何ですか？「国宝や重要文化財」、「昔の大事なものの」、「次の世代にたいせつに伝えるもの」などなど…。人類が昔から限られた材料と道具によって生み出してきた文化財は、先人たちの経験と工夫が詰まった「ものづくり」の結晶であり、我々の生活に欠かすことができない「こころのインフラ」なのです。文化財を大事に継承することは、文化財に秘められた「人間の知恵」を読み解き、未来に生かす「温故知新」の実践なのです。



村上 隆

高岡市美術館館長・大正大学招聘教授

京都大学工学部、同大学院工学研究科修了、東京藝術大学大学院美術研究科修了。学術博士。奈良文化財研究所上席研究員、京都国立博物館学芸部長、京都美術工芸大学副学長等を歴任。専門は、古代から現代に至る材料と技術の変遷を読み解く「ものづくり文化史」、「文化財学」、「博物館学」。阪神・淡路大震災以降、文化財防災・救援の普及・啓発にも携わる。著書に、「文化財の未来図」(岩波新書)、「金・銀・銅の日本史」(岩波新書)、「文化財は守れるのか？—阪神・淡路大震災の検証—」(コーディネーター・編集)(クパブ)他多数。

第 2 部 (14:30~15:15) 事例紹介と話題提供

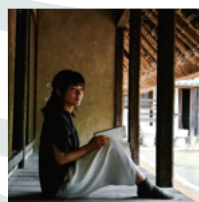
全国的な文化財の現状についてや、神戸市の文化財の取り組みや活用事例紹介を行います。また海外の茅葺きの状況を踏まえたこれからの文化財のあり方など、パネリスト 3 名から話題提供を行います。



黒坂 貴裕

八戸工業大学 工学部工学科 建築・土木工学コース教授

長く文化財分野で働き、現在郷里の青森で大学教員として勤務。文化庁時代にはユネスコ無形文化遺産の伝統建築工匠の技などに携った。学生と共に地域の歴史文化を見直し、茅葺き新時代を目指して活動中。



伊藤 絵実里

(株)くさかんむり 地域おこし担当

千葉大学工学部デザイン学科修了。大学時代に地方のフィールドワークを中心としたデザイン手法について学ぶ。現在は神戸地域おこし隊(山田町担当)兼くさかんむりの地域おこし担当として、文化財の活用に取り組む。



相良 育弥

(株)くさかんむり代表 茅葺き職人

神戸市北区淡河町を拠点に民家から文化財まで幅広く手掛ける。2011 年に独立以降は茅葺き活用の進むオランダなどに訪問。屋根以外の茅葺き技術等を学び、日本で茅葺きを現代にフィットさせる活動に精力的に取り組む。

第 3 部 (15:30~16:30) パネルディスカッション

文化「的」な価値をまもり、今後の未来につなげていくために何ができるのでしょうか、そしてそこにはどんな課題や可能性があるのでしょうか。また、どんな仕組みづくりや活動に取り組んでいけばいいのか、都市と農村が近い神戸だからこそできることや、神戸モデルの官民連携のあり方などを様々な視点から考えます。

2024 年 12 月 15 日(日) 13:30~16:30 (開場: 13:00~)

参加費

無料

定員

50 名(事前申込、先着順) ※申し込み締め切り 12/11(水)

申込方法

オンラインの申込フォームから、もしくはお問合わせください。

会場

デザインクリエイティブセンター神戸 (KIITO)

お問合せ

ito@kusa-kanmuri.jp
090-2471-3414(担当: 伊藤)



アクセスマップ

